

A. I. Chicherov: *India, Economic*

Development in the 16th-18th

Centuries, Outline History of

Crafts and Trade

(Translated from the Russian by Don Danemanis)

長 島 弘

本書は、A・I・チチエロフ氏が一九六五年にロシア語で発表した『イギリス侵略前におけるインドの経済発展』(A. И. Чичеров, Экономическое развитие Индии перед английским завоеванием, Ремесло и Торговля в XVI-XVIII вв., Москва, 1965) の Don Danemanis による英訳である。

著者が本書で設定した課題は、第一に、イギリスの植民地化されたことによってその生産諸力を破壊され、経済・政治・文化の発展をゆがめられていく直前のインド社会の発展段階、とりわけ社会的分業の発展・商業と工業の諸形態の研究であり、第二に、それらが中世末期以降のヨーロッパの経済的発展の影響をうけているかどうかの研究である。そして彼は、一七〜一八世紀のイン

ドは封建的社会構成体のなかで初期マニファクチュア段階へと向かいつつあった、そしてそれはヨーロッパ諸国の資本というよりはインドや他のアジア諸国資本と直接に結びついて生じてきたものである、と結論づける。著者はその結論づけを、多くの典拠を示して、地域的差異を考慮しつつ実証的に行っている。

当該時代の商工業の発展段階に関するわが国での研究は、まだ極めて限られており、ここに本書をとりあげることが意義あることと考える。限られたスペース内で、実証的かつ多面的な本書の内容を十分に紹介することは不可能であるが、以下では、主に論旨の整理された「結論」部分に依拠しつつ、可能な限り各章の内容でもって補足するという形で紹介を行い、その後二、三の疑問点を述べてみたい。なおすでに本書の簡要な紹介と書評が、近藤治氏によって行われている(「インド資本主義形成の特質」、中村平治編『現代インド史の展望』所収)。

はじめに、本書の章別構成を記しておこう。

序説

第一章 村落共同体の手工業Ⅱ経済構造の伝統的諸形態

第二章 手工業における小商品生産

第三章 内外貿易。都市の発達。ヨーロッパ諸国の経済的進出

第四章 商人資本による手工業の従属化。手工業における協業

と資本主義的諸関係の発展

結論

〈序説〉では冒頭に述べたような本書の課題設定を行ったあと、当時の社会の土地制度、イデオロギーのおよび政治的側面は、商工業を取扱う本書の範囲を超えているので、最少限必要な限り触

れるに止めることわっており、又、南北インドの比較に留意しつつインド全域を対象とし、一六世紀後半〜一八世紀後半を中心に考察範囲を限定する、としている。

〈第一章〉 一六〜一八世紀のインド亜大陸の諸国では、さまざまな発展段階の社会構造が支配的であった。ソ連邦での諸研究によれば、インド特有の農工結合に基づく村落共同体はすでに中世に多くの地域で形成されていたが、それは共同体的土地保有権と私的土地保有権との複雑な組合せからなっていた。この共同体的人的構成は正成員とそれ以外とからなり、正成員は、世襲の土地を耕作し、貢租を納入する限りその土地から追立てられることはなく、共同体的土地保有権の課する制限内である限り、その土地を売却できた。彼らはまた、他村からの入作農民や村落職人や奉仕人たちを搾取していた。この伝統的な自給自足的な共同体における手工業の形態には、農民家族による自家消費のための家内工業と、共同体の世襲の専門職人による手工業とがあった。前者では紡織・絞油・製糖作業などが行われ、一九世紀初めにおいても多くの地域で存続していた。後者には金銀細工師・鍛冶工・大工・石工・陶工・洗濯人・床屋・皮革工などが含まれ、彼らははじめ村抱え制で維持され、伝統的に定められた量の穀物あるいは(半)免税地の支給が共同体によってなされた。しかし、一六〜一八世紀を通しての商品・貨幣関係の発展と封建的支配層による搾取の強化は、共同体の正成員間の階層分化、すなわち彼らの多数の封建的小作人化、上層部分の封建的支配者への上昇転化をひきおこし、共同体を漸次崩壊させていった。この間、国家的封建的土地所有にかわって私的封建的土地所有が広範なものとなりつ

つあった。共同体の正成員間のこのような階層分化は、職人たちの村抱え制を困難ならしめ、職人たちは、特定の農民家族と直接的奉仕関係にはいり、奉仕の量の多寡に応じて報酬を現物(後には貨幣)で支給されるようになった。これはまだ封建社会に典型的な顧客(消費者)に対する注文生産に過ぎないが、それは次第に農民と職人との間の商品関係にとって代られていく。しかし村抱え制度と現物報酬制度は、一九世紀初頭においても、おそらくベンガルとマラバルを除いては、まだ大変広範に存続していた。長い戦争や重税は、これらの制度を崩壊させるのではなく、かえっていびつに固定化した。

〈第二章〉 商品関係の発展のもとで、さきにみた二形態の手工業が市場むけの製品を生産するようになり、ここに農民的小営業と専門職人による小営業という、手工業における小商品生産の二形態が発生した。農民的小営業は、しばしば商業的農業と結合した。この形態での綿紡織・養蚕・製糸・硝石生産・天然染料生産・製糖・絞油・鉄鉱石の採掘・精錬業などが、一六〜一七世紀以来みられ、一八世紀末には顕著なものとなった。綿糸生産には自家生産の原綿を使用する段階と、市場で購入した原綿に依拠する段階とがあり、製糸業では、桑栽培・養蚕・製糸過程がそれぞれ次第に專業化していった。次に、都市や農村の専門職人による小営業も前者に劣らず多様な部門でみられた。たとえば、紡糸工は大部分が原料入手の容易な農村地帯に居住し、一七〜一八世紀には需要の増大に伴なって、その従業人口はバラモン女性を含むさまざまなカーストの出身者を吸収して増加していった。製糸業は、グジャラート、ベンガルやビハールなどで発展し、一九世紀

初頭（衰退期）のバガルブルー地区（ビハール）でも総人口二百万人強のうち一六万九千人を占めた。綿織工は一六世紀頃から次第に都市やその近郊に集中するようになり、たとえば一七世紀中葉のベナレス市周辺には七千人の織工がいた。彼らは道具・食料のみならず、原料をも市場で購入した。これらの専門職人たちも多くは農業にも従事し、そのため何らかの形で土地に緊縛されていた。南インドのカイコーラと呼ばれる織工たちは、多く分与地を持ち、その富裕な者は積極的に土地を購入したが、一九世紀初頭のベンガルの織工たちは通常自らの土地を耕作せず、分益小作に出すか、時には雇農を雇うかしていた（マイソールでも雇農を使用）。以上の二形態の小業者は、インドの農村や都市、とりわけ後者の人口の大部分を占め、当該時期のインドの諸国の経済に重要な役割をはたした。当時における手工業生産の増大は、単に職人数の増加のみならず、社会的分業の発展や道具類の進歩をも伴っていた。

〈第三章〉 一六―一八世紀は、農村地域を含む国内貿易や、それを上まわる外国貿易の発展をみた時期であった。農民経済における商品生産の発展は、主として賃租の現金納化によって促進された。そして、一八世紀末のビハール、ベンガルやマイソールでは農民が市場で粗布を購入することもまれではない程であった。多数の新しい都市（ヨーロッパ人の交易活動に負うものも含めて）が発生・発展し、商工業活動の中心地となり、広範な農村地域と広く交易関係を確立した。ただし、都市から農村地域への商品―主に布類や農具類―の流通は、その逆の物資の流通よりも少なかった。各地方市場の抱擁する範囲は、大体亜大陸の一ないし

二の主要な民族の居住地域と一致した。しかし、このような地方市場の形成速度には地域差があり、ラージャスタン、オリッサやマハラシュトラでは、ベンガル、グジャラート、ゴールコンダあるいはマイソールなどよりずっと遅れていた。交易の漸次的拡大と地域的分業の一定程度の発生が、全国市場形成のためのいくつかの重要な前提をつくった。ヨーロッパ諸国の諸貿易会社の投資その他の行為が、手工業製品のための市場拡大にかなり寄与したことは明らかである。ポルトガル人は、暴力と略奪でグジャラートとマラバルでの貿易活動に手痛い打撃を与えたが、ベンガルやゴールコンダでの貿易を發展させたし、オランダ人やイギリス人の貿易も同地域での織布業の發展に刺激を与えた。しかし、インドの内外市場は、一八世紀後半に至るまでは、まだ圧倒的にインド人や他のアジア諸国の商人たちが支配していたのであり、この時期のインドの外国貿易の發展にとって最も重要な役割を担ったのは彼らだったのである。封建的支配者のイニシアティブの下でも多くの都市が發展したが、それらが地方経済の有機的な部分を構成せず、単なる軍屯地にとどまった場合には、支配者がその都市を放棄した後に衰退した。すでに少し触れたが、都市人口の過半数は商人、職人、雇用労働者が占め、農業に従事する者もかなりいた。たとえば、T・マーシャルによれば一八世紀末―一九世紀初頭頃の南マハラシュトラのベルガウム町の総人口約七、六〇〇人（一、三〇九家族）の二一%が不労所得者、一三%が商人・高利貸、二七%（二、一〇〇人）が専門職人（そのうち半数以上が織工）、二六%が農民、一二%が雇農であったという（なお、深沢宏著『インド社会経済史研究』五二九頁には、一九世紀

中葉の同町の人口三万人ほどのうち約四〇〇〇〜五〇〇〇名が織工であったという記録が載っている。都市職人には自らの生産手段を所有する層と雇用労働者層の二階層があり、前者の人口は後者より少なかったであろう。多くの商人コミュニティのみならず、個々の大商人も遠隔地に代理店を持ち、経済発展に大きな寄与をし、また莫大な資本の蓄積を行った。

〈第四章〉 手工業における封建的な労働編成の形態として、家族内分業に基づく小経営（一、二章でみたもの）、数人の徒弟を使用した同職組合親方的な経営（織工、鍛冶工など）、アルテリの協業（一八世紀末の史料にみられるマハーラシュトラ、マイソールやベンガル等での製鉄業や製糖業）、しばしば前貸金をも伴なうところの、買占め商人による手工業者の隷属化、さらに封建的支配者たちの作業場（カール・ハーナ）での協業などが、当時一般的にみられたことは豊富な史料が示している。ただし、それら相互間の地域的偏在度や量的関係の特徴を示すことは不可能である。

しかし、当該時代における社会的分業の発展、内外市場の発展などによって、資本主義的諸関係の萌芽が発生した。究局的には資本主義的家内工業を発生させるころの、職人への現金前貸制度は、手工業のかなり広範な部門を抱摂した。インド各地の織工や、ベンガル、ビハールにおける硝石生産者などの間にそれがみられた。道具は所有しているものの原料や生活手段を、商人から与えられた前貸金によって購入せざるをえないという事実上の賃金労働者も発生した。次に原料前貸の間屋制度は、一七世紀以来のコロマンデルにおける捺染工や晒工、一八世紀末〜一九世紀初

頭のビハールでの染色工・製靴工・絞油工、マハーラシュトラやカシミールでの絹織工に対して採用されていた。とりわけコロマンデルの捺染業においては、間屋制家内工業に分業が導入されたところの分散マニユファクチュアの端緒形態もみられた。資本主義的単純協業は、コロマンデル、オリッサ、マイソール、ベンガル、ビハールやマハーラシュトラなどにおける綿織業、一八世紀末のカシミールにおけるショール織業、他に捺染・硝石生産・製鉄業や建設業で広範にみられた。資本主義的マニユファクチュアも、いくつかの手工業部門に発生した。すなわち、ベンガル、オリッサ、ゴールコンダやグジャラートでは商人が造船所を経営し、数十名もの賃金労働者を雇用していたし、一八世紀のマイソールやビハールでは製鉄所で五〇名もの賃金労働者を雇用し、一八世紀後半のベンガルや、一八世紀はじめのグジャラートやそれにベナレスでは、製糸場で百名にも及ぶ労働者を雇用し、カシミールやパンジャープにおけるショール織業では数百名もの賃金労働者を雇用していた。ゴールコンダのダイヤモンド採掘業や一八世末〜一九世紀はじめのベンガル、マイソール、マハーラシュトラにおける製糖業、マイソール、ビハール、ヒンドウスタンにおける藍製造業などもこれに含めることができる。一八世紀のマハーラシュトラやマイソールでは商人や富農により、借地で雇農を雇って砂糖きびや綿花を栽培する資本主義的農業もみられた。しかしこれらの例においても、まだ封建的統制や、労働力の自由な雇用の未成熟、親方と労働者との間の地位の欠如などに従前の生産様式の特徴を残していた。一八世紀には資本主義的生産関係は散発的に一部の工業部門、一部の地域に発生したに過ぎないが、

一八世紀末〜一九世紀初めには、それはより多くの経済的先進地帯に広まった。かくして冒頭に述べたような結論が導き出されるのであるが、紹介を終える前に今まで触れなかった商工業者と封建的支配層との関係について若干触れておこう（一・二・三章と結論を参照）。

村落共同体の職人や小商品生産者たる専門職人たちのカースト組織や、商人たちの諸コミュニティは、ヨーロッパにおけるギルド同様、封建的搾取のための手段——納税連帯責任を負わせるなど——としての側面と封建的支配層（あるいは小商品生産者に対する商人・高利貸資本家たち）の側からする過度の搾取に抵抗するための手段としての側面の両面を有していた。彼らの抵抗の形態として、逃散・同盟罷業・罷市・武装蜂起などがとられた。彼らの激しい反封建思想は、当該時代において、バクティ教義、初期のシク教教義などに表明されており、また、たとえば、シャール・ワリーウツラーの著書などには、まだ初歩的な形ではあるがブルジョア的主張も現われはじめた。商人と封建的支配者との関係は以上に尽きず、より複雑で、商人の徴税業務の請負い、戦争資金の貸与や、土地等の購入による封建的支配者への転化などがみられ、他方、封建的支配者の内外貿易への参加、特定農産物の国家による生産と売買の独占、铸貨権等をめぐる対立などもあった。一六世紀初頭のヴィジャヤナガル王国のクリシュナデーヴァラーヤ王やムガル帝国のアクバル皇帝らは、商業を保護し発展させることによって、封建階級全体の地位を強化しようとする努力をなした。特にアクバルとその宰相アブル・ファズルの思想と行動は、一六世紀後半〜一七世紀初頭におけるインドの封建社会の最も進

歩的な潮流を示していた。一七世紀後半から一九世紀初頭にかけての封建反動は、資本主義的生産諸関係の発展を阻止しようとはかり、時にはそれに成功した。またイギリスの植民地主義者は、本源的蓄積過程の第一歩を歩み出したところに過ぎないインドの商業・産業資本家たちを外国市場から切断し、自らに従属させることによって、かれらの政治的経済的発展を困難にさせ、かれらの多くを破滅させた。そして、買弁資本家あるいはマニユファクチュア経営者の形で生き残った者たちが一九世紀インドの民族ブルジョアジーの先駆者となっていたのである。

以上の不十分な内容紹介では、実証的な本書の意図を伝え得ないもどかしさが残るのであるが、本書のメリットは、植民地に転化する直前のインドにおいて小商品生産工業、問屋制家内工業、資本主義的単純協業、資本主義的マニユファクチュアの諸形態が存在していたことを、地域差を考慮にいれつつ、ともかく全インドを対象に検証した点にあるだろう。これは、インド史を發展のない絶対的に停滞的なものとみる史観に対する一つの有効な反証を提示したものとさえいえる。

しかし同時に、本書に対する疑問のいくつかも、研究のいまだ不十分な現段階で本書があえて全インドを対象にとりあげたことから必然的に生起するともいえる弱点、不十分にむけられよう。すなわち、本書がまず伝統的な村落共同体の崩壊過程をごく一般的に理論的に提示した後、おのおの違った発展段階にある工業の諸形態が、当該段階のインドに存在していたことを地域差を考慮しつつ示すのであるが、やはり、各地域における封建社会（と著者はみている）の特質を分析し、その上に、それぞれの地域で

の工業の諸形態の発生を位置づけ、それを基礎に各地方の特質を比較する、という方法が今後追求されねばならないだろう。

次に、それと関連することであるが、村落共同体の崩壊についての理論が、十分説得的なものになっていない。まず第一に、従来ともするとアジアの専制主義の基礎とされた「伝統的な自給自足的な村落共同体」が、何故、封建制の基礎とされるのか不明である。もちろん著者は、共同体の正成員の外に、入作農民などの存在を指摘しているが、それらについての十分な説明がないし、雇農がいたかどうかについては触れていない。また、このような共同体が「中世」にはすでに存在していた（一六頁）とするが、そのような共同体はいつ頃形成されたものであろうか。次に、著者は一六〜一八世紀に、このような共同体は崩壊過程にあったとするのであるが、共同体正成員層の分解の結果析出されてくるのは、上層の封建的支配者への上昇転化、他の層の封建的小作人への転化であって、農民層分解の出発点たるべき自由な自営農民はどこにも見出せないし、ましてや、彼らの分解によって生ずるところの二重の意味での自由な労働者も見出せないのに、資本主義的な諸関係が存在するのはどうしてなのだろうか。要するに、封建的な支配従属関係を新たな形で再生産する共同体農民層の分解と資本主義を発生させる農民層分解との段階的差異が不明確であり、歴史的には前者からなしくず的に資本主義が発生したかのような印象が与えられることを否定できない。また、伝統的な共同体を基礎とする段階の封建制とその崩壊段階の封建制との特質の差異の分析がなく、封建制はきわめて抽象的なものとしてしか扱えられていない。国家的封建的土地所有と私的封建的土地所有

についても本書では殆んど説明がないが、彼は「一六〜一八世紀には、国家的土地所有という『上層物』の看板のもとで、私的封建的所有がすでに長期にわたって存在していた」（福富正美編訳『アジアの生産様式の復活』三五五頁）と捉えているようである。それでも、ともかく私的封建的土地所有が拡張しつつあったとみているようであるが（二三〇頁）、そのことと資本主義的諸関係の発展との対応関係の分析も十分になされていない。これらの点は、著者が冒頭にことわっているところであるけれども、その説明がないと、資本主義的な諸関係の存在が指摘されても、それが歴史的規定性の薄いものになり、何か特殊なもの、例外的なものであったという印象を与えかねないのである。

次に、やや具体的になるが、著者は共同体の職人の村抱え制から個別農家による出来高払い制（いわゆるジャジマーニー制度もこれに含まれるのであろう）、さらにそこにおける現物報酬から現金報酬への発展を推定しており、理論的には肯首できるのであるけれども、本書にはその十分な実証がなされていない。すでに内容紹介のところでも触れたように、マラバルとベンガルでは現金報酬ないし、共同体の職人の小商品生産者化が最も進んだところとされており、両地方の外国貿易に占める位置等から考えて、一応肯定できるのであるが、ベンガルに関しては共同体の職人についての史料が不足しているという点であり、マラバルに関してはバルボザ D. Barbosa に拠ったとして鍛冶屋・大工・金銀細工師などの職人が一六世紀はじめにすでに農民から報酬を現金でもらっていたとする（四一、七三頁）が、バルボザの当該ページには王・バラモンやナヤールのために働く洗濯人カーストが

現金報酬をうけたことしか述べられておらず鍛冶屋・大工等について述べたページには、そのような記述はないのであり、再検討する必要がある。

次に問屋制やマニユファクチュアについて気づいた点を述べよう。まず、造船業や建築業についてみると、そこにおける分業が固定したのになつていたのかどうか、あるいは技術過程だけかあるいは造船業などは、本来的に分業にもとづく協業という形態を取りやすいものであるが、生産関係の面において資本主義的であるかどうかの分析が不十分なように思われる。海上貿易の盛んであったインドの海港で、直接航海に関係ある造船業で資本主義的なマニユファクチュアが早期におこつても不思議ではない（むしろ考察の範囲を一六世紀までに限定しないで、もっとさかのぼらせるべきであろう）が、その存在でもって直ちに社会全体がマニユファクチュア時代へ向かうという保証はなく、そういう点からいって問題になるのはやはり、綿紡織業や製糸・絹織業であろう。本書によれば、紡糸業は専ら農民の小営業又は専門職人の小営業として行なわれていたのに対し、綿織業では現金前貸制度（或小親方制度）あるいは資本主義的單純協業が相当早くから地域によってはかなり広範にみられたのであるが、マニユファクチュアとはつきり言えるものの例証はない。しかし、深沢宏氏は一九世紀中葉の南マハラシュトラにおいて、二五台から三〇台の織機を所有する親方の存在について言及している（『インド社会経済史研究』五三〇頁）。それがどれほど分業をとり入れたものかは不明であるが、マニユファクチュアであることも十分考えられ、今後、より早い時期に、また他地域でも存在が確認できるか

みていかねばならぬだろう。著者は、綿織業において原料前貸の問屋制度が広範に普及していたことを示す史料がないという興味深い事実を指摘して、その理由を農村地域では原綿の入手が容易であり、綿糸も容易に入手できたし、手織のため個々の織工の使用する綿糸量が極少であったことをあげている（一八一頁）。技術的限界性、消費量の少なさが原料前貸制の発展を制限していたといえるようであるが、イギリス東インド会社は一七世紀にベンガルやグジャラートですでにこの制度を採用しており、その際の理由として、織工が貧しいため現金を前貸しても規定の品質の綿糸を購入できない状態にあったということがあげられている（cf. I. Habib, "Potentialities of Capitalistic Development in the Economy of Mughal India," *Enquiry*, New Series Vol. III, No. 3, 1971, pp. 43-44）。都市での織工の問屋制家内工業の存在についてさらに追求する必要がある。

著者は、ヨーロッパ資本の影響をあまり高く評価していないのであるが、貿易量に関する著者の利用している史料は必ずしもそれは読みとれないものがある。たとえば、一七世紀後半〜一八世紀初頭のベンガルからの輸出の約二分の一はヨーロッパ人の手中にあったことを示す史料もあげられている（二三〇頁）。また、ベンガルでの製糸業におけるマニユファクチュアの発展は一八世紀後半以降であり、ヨーロッパ資本の影響も簡単には否定しえないであろう。綿織業における資本主義的單純協業は、一六世紀以前の南インドの刻文にみえる親方―徒弟制度から発展してきたものとも考えられるが、オランダ東インド会社の東海岸での活動と結びつける説も示唆されており（深沢宏、上掲書、五三一頁を参

照)、この点も今後深めていかねばならないであらう。

他に、著者が依拠している史料がやはり、一八世紀末〜一九世紀初頭のものが多いため、一八世紀初頭以後ムガル帝国衰退期に経済的には持続的発展があったのかどうかという点についても今後の研究に待たねばならないし、一四世紀初頭にはすでに貢租金納制が実施されていた北インド中央部がおそらく戦乱等々の影響で、一八世紀以降には、経済的に後進地域とみなされるようになる点も、今後史料の発掘を行いつつ研究を深めねばならない点であらう。

最後に、問屋制度やマニファクチュア存在が検証されたとしても、前者はもちろん後者も技術的には保守的であり、場合によっては同一技術水準を数百年も固守するのであり、その点、本書では技術的側面も検討されているがまだまだ不十分であり、今後深める必要があると同時に、植民地時代にインド経済がイギリスの支配によっていかなる影響をうけ、それにいかに対応していたのかを具体的に研究していくことが大きな課題であらう。

以上、私なりに疑問点を述べるにとどまったが、本書は、インド前近代の商工業の発展に関する研究の一つの総合の試みであり、今後のこの方面の研究にとっての基礎となるものと確信する。

(B6版 二八二頁 一九七一年 Moscow "Nautka" Publishing House, Central Department of Oriental Literature)

(京都大学文学部大学院生)

前嶋信次・加藤九祚共編

『シルクロード事典』

濱田正美

世の中には久しい以前から、かの古代史ブームに並んで、シルクロードあるいは西域のブームというものもあるらしい。近頃は益々隆勢のようで、評者などはあまり手に取ることもないが、書店の棚には、「シルクロードの何とぞか」「西域の何々」などと題する本が常に見られるし、旅行社もシルクロードの旅と銘うって、ソ連領中央アジアやアフガニスタン、イランの旅を売り出しているという。思うにこのブームは、かなり日本に特有の現象のようで、詳しく調べたわけではないが、silk road, route de la soie はたまたま本家本元の *Sidenstrassen* にしても、日本語の絹の道あるいはシルクロード、ほどには、広く知られた単語ではあるまい。この現象を、どこかで大道と繫っていることを常確認したが、この現象を、どこかで大道と繫っていることを常確認したが、これは大いに正鶴を射ているかもしれぬ。が何はともあれ、中央アジアに対する関心が一般に広く存在するらしいことは、その関心の在り様には吟味が必要だとしても、まずは慶賀すべきことであらう。

さて、「シルクロード事典」の構成を紹介すると、護雅夫氏の「シルクロードと東西文化の交流」林良一氏の「正倉院——シル